

「西行桜」を歩く

J R京都駅からJ R向日町駅までは3駅ほぼ7分、J R向日町から徒歩12分の阪急東向日駅に向かい、駅前ロータリーから阪急バスで30分ほどの南春日町停留所下車。標識に従って大原野神社の前を通り過ぎながら30分かけてゆっくり住宅街の道を登っていくと、今回の目的地、西行法師が出家し庵を結んだといわれる天台宗大原員院勝持寺（京都市西京区大原野）に着きます。

三方を山に囲まれた京都盆地の西側にある西山連峰は、火難よけの神として有名な愛宕神社を祀る愛宕山へも通じます。勝持寺は西山連峰の小塩山のふもとに位置し、竹林が点在する大原野の静かな風景が一望できる景勝地でした。大原野は長岡京や平安京の時代から貴族が狩や花見に訪れ、古くから開けていたとはいえ、今でも都の喧騒からは遠く離れた地域です。

能には、「嵐山」「右近」「熊野」「西行桜」「桜川」等、桜が舞台となる曲が沢山あります。桜は古くから私たちに馴染みの花であるとともに、「桜の花には神が宿る」というどこか神秘的な想いも込められています。

西行は俗名・佐藤兵衛義清といい、鳥羽上皇に仕えた北面の武士でしたが、保延6（1180）年に勝持寺で出家しました。お寺の縁起によれば、勝持寺は、天武天皇の勅により白鳳8（679）年に創建され、承和5（838）年に仁明



↑100本を超える桜が満開の勝持寺境内。



↑小塩山勝持寺へ。
バス停からこの入口までも登坂です。



↑応仁の乱の戦火をのがれ、今も荘厳な姿を見せる仁王門。



↑いよいよ仁王門へ。

←桜と権が美しい参道をさらに登って勝持寺南門へ。

廣田 幸稔

天皇の勅によって塔頭49院が建立されましたが、応仁元年（1467）年から文明9（1477）年に至る応仁の乱の兵火に遭い、仁王門を除きすべて焼失し、現在の建物は乱後に再建されたものだそうです。西行がこの地で過ごした時は、多くの塔頭が並ぶ大寺院であったと思われる。勝持寺までの長い参道が多くの塔頭が立っていたことを忍ばせません。風雅な上京の人々とはいえ、毎年桜を目当てに花見客が来たとなると、西行が詠んだ「花見んと むれつつ人のくるのみぞ あたら桜のとはにはありける」の「むれつつ」の文字が急に現実味をおびたようにも見えました。桜の花が咲くころは、誰でも心が浮き立ちます。可憐なつぼみは華やかな開花を期待させますし、散り際でさえ過ぎゆく季節の名残を込めた風情があります。気心の知れた友人と連れ立って賑やかに見たい花見も、西行のように独り静かに楽しみたいと思う花見も、どちらの鑑賞も頷けます。境内にある西行が植えた桜は3代目で、可憐な花をつけていました。

西行の出家の理由はわかっていません。鳥羽上皇の中宮に失恋したとの説や親友の突然の死が原因との説などがありますが、真偽は定かではありません。出家したのちの彼は和歌の名所を尋ねて全国を回り、歌人として2,300首あまりの歌を残しました。最期は、自ら詠んだ「願はくは 花の下にて春死なむ そのささらぎの 望月のころ」の歌のとおり、文治6（1190）年の2月16日（現在の暦の3月中旬）、73歳でなくなつたそうです。花に対する西行の想いが心に沁みます。

令和三年四月吉日



↑勝持寺あたりから大原野を望む。小塩山のふもととはいえ、かなり登っています。



↑西行お手植えの桜の前で、孫・明幸と。



↑阪急バス。帰りは夕方になりました



↑バス停には「クマに注意」の貼り紙がありました。